

(原文URL:<https://mailchi.mp/theibta/rculorsyeg-2299265>)

IBTA e-News

国際脳腫瘍ネットワーク 月刊ニュースレター

2020年10月号

【トップニュース】

国際脳腫瘍啓発週間です

今週は国際脳腫瘍啓発週間[2020年10月24日(土)～10月31日(土)]であり、国際的な脳腫瘍コミュニティが一丸となって、脳腫瘍の課題と研究への取り組み強化の必要性を注意喚起する啓発活動の祭典です。

今年はCOVID-19パンデミック発生のため、活動を安全に実施することが非常に困難です。しかし、この特別な週だけでなく、一年のどの時期でも脳腫瘍に対する意識を高めるために、私たち全員ができることがあります。例えば、バーチャルグループでウォーキング、ジョギング、サイクリングを企画、地元のメディアへ自分自身の経験を発信、ソーシャルメディアに啓発メッセージを投稿、友人や家族と一緒にZoomでお茶会やクイズを開き重要な脳腫瘍研究のための資金を募る、脳腫瘍に関する教育的なウェビナーを開催、オンラインで教育リソースを立ち上げたりする、といったことなどです。脳腫瘍診断の特定の課題や、特別な対応の必要性、研究への取り組みのさらなる必要性を認識してもらうため、規模の大小にかかわらずどんな活動でも、国際的な脳腫瘍コミュニティはあなたにお願いしたいと思っています。

何かしらの活動に参加できる場合は、ぜひお知らせ下さい。私たちのオンラインフォームに、ご自身の啓発週間活動を登録していただき、活動報告もしていただきたいと思います。現在の国際脳腫瘍啓発週間のイベント、活動、記事に関するニュース共有用ソーシャルメディアのハッシュタグは#IBTAWeekです。

この特別な期間、支援または連絡を取ることのできる脳腫瘍の慈善団体や組織をお探しの方は、ご自身の国の団体のリストが表示されている[IBTAアライアンスマップ](#)をご覧ください。

脳腫瘍患者の権利憲章をできるだけ多くの言語に翻訳できるようご協力をお願いします

脳腫瘍患者の権利憲章は、2020年7月に制定され、現在までに70以上の患者団体、医学会などの賛同を得ています。現在、この憲章は7カ国語(中国語、フランス語、ギリシャ語、ヒンディー語、日本語、ポーランド語、ポルトガル語)に翻訳されています。脳腫瘍患者の権利憲章をあなたの母国語へ翻訳するボランティアにご興味のある方は、kathy@theibta.org までご連絡をお願いします。権利憲章と翻訳者用のガイドラインについての詳細はこちら:<https://theibta.org/charter/>。

Matthias Preusser氏が欧州脳腫瘍学会の新たな会長に任命

2020年～2022年の欧州脳腫瘍学会(EANO)の会長に選ばれたMatthias Preusser教授に心よりお祝い申し上げます。同氏はウィーン医科大学の腫瘍内科(internal oncology)教授であり、ウィーン総合病院(AKH)でウィーン医科大学の臨床腫瘍分野長を務めています。Preusser教授は、2016年からEANO理事会のメンバーであり、2018年から組織の会計役となりました。約700人の会員を擁するEANOは、脳腫瘍の治療と研究の向上を目的とした学際的な団体です。詳しくは[こちら](#)を参照。EANO理事会の詳細は[こちら](#)。

【治療関連ニュース】

COVID-19パンデミック中に神経腫瘍内科の電話診療を受けた患者による報告

Clinical Oncology誌に発表されたレターによれば、英国ロンドンでCOVID-19パンデミック中に、神経腫瘍を有する50人の治療継続患者の経験を調査した結果、対象となった患者の50%超が電話診療よりも対面診療を好んだことが示された。しかし著者らは、「神経腫瘍の電話診療は、特定の環境では、効率性と高い満足度をもって対面診療に代わることができる」と指摘している。著者らは「ハイブリッドモデル」を提案し、これにより適切な場合で画像診断結果が安定している患者にとっては、新しい技術を取り入れた遠隔医療を用いた診察が1つの選択肢となり得る。詳しくは[こちら](#)。

がん症状のチェックを受けるよう推奨するキャンペーンが英国で開始

イギリス国内では有名人や慈善団体によって、がんにつながる恐れのある症状を無視しないよう、そして定期的な来院を続けて診察を受けるよう国民に働き掛ける取り組みが推進されている。10人のうち4人を超える人が、コロナウイルス大流行の前には通常受けていたであろう健診を、流行後は受けずに長く放置しているというエビデンスが認められた。そのためテレビ広告、看板、ソーシャルメディアを通じて、英国国民保健サービス(NHS)の「あなたを助けるために私たちに協力を(Help us to help you)」イニシアチブが、がんかもしれないと症状を心配している場合かかりつけ医に相談するよう促している。詳しくは[こちら](#)。

【研究ニュース】

脳腫瘍の小児および青年を対象とした5-アミノレブリン酸(5-ALA)の臨床試験をドイツで実施中

5-ALAは、脳腫瘍細胞を青色光の下でピンク色に発光させることにより脳神経外科手術を補助するように設計された薬剤であるが、「 Tent上」脳腫瘍(脳の上部領域にあるもの)の小児および青年を対象とした5-ALAの臨床試験がドイツ国内の施設で実施されている。5-ALAは現在成人の脳腫瘍手術を適応として承認されている。

この第2相試験では、80人の患者の募集を目指しており、若年患者(3~18歳)を対象とした5-ALAの安全性と有効性を確立することを目的としてデザインされている。この医師主導臨床試験は、Photonic社の支援を受け、ドイツのミュンスター大学のWalter Stummer教授が主導している。この試験に関する情報は、[こちら](#)のEU臨床試験登録(EU Clinical Trials Register)に掲載。

COVID-19と悲しみに関する調査—英国在住者へ回答求む

カーディフ大学のマリー・キュリー緩和ケア研究センターとブリストル大学は、英国在住者を対象に、パンデミック中に肉親を失った遺族の悲しみ(グリーフ)の経験と支援の必要性についての調査を実施している。

英国在住でパンデミック中にCovid-19や別の原因により大切な人を亡くした方の中でこの調査にご参加いただける場合は[こちらwww.covidbereavement.com](http://www.covidbereavement.com)。調査の詳しい情報や用紙に関しては、エミリー・ハロップ harrope@cardiff.ac.uk (tel: 02920 687184)まで。注意:この調査は英国在住の方のみ対象

成人毛様細胞性星細胞腫の転帰不良の危険因子に年齢と体重が含まれていることが明らかに

[Neuro-Oncology誌](#)に発表された研究では、通常小児に見られるが成人ではまれな脳腫瘍である、毛様細胞性星細胞腫と診断された成人患者の転帰に影響を与える可能性のある因子が検討された。2000年から2018年の間に毛様細胞性星細胞腫と診断されたオーストリア、ウィーンの成人患者(19~74歳)46人の転帰を調べたところ、成人の再発率は小児の再発率よりも著しく高いことがわかった(成人の再発率19.6%に対して小児の再発率約10%)。また、年齢が高いことや体格指数(BMI)が高いことも予後不良の危険因子であることが判明した。詳しくは[こちら](#)。

オーストラリアの個別化医療プログラムの結果が悪性度の高いがんを有する小児に大きな利益をもたらすことを示す

オーストラリアで進行中の[ZERO小児がん全国臨床試験](#) (遺伝学的・分子学的検査技術を用い、リスクの高いがんを持つ小児のための個別化された治療法を特定しようとする試験)の結果が、[Nature Medicine誌](#)に発表された。このプログラムに最初に登録された250人の小児のうち、検査により67% (134人)の小児に効果のあると期待された少なくとも1つの新しい治療法が特定された。新しい治療法が特定された子供のうち、43人がそれらの治療を受けている。詳しくは[こちら](#)と[こちら](#)を参照。

膠芽腫における放射線治療抵抗性の分子経路が発見される

[Neuro-Oncology Advances誌](#)に発表された論文によると、膠芽腫の放射線治療に抵抗する力を制御する鍵となる分子が同定され、将来の治療法の標的となることが明らかになった。遺伝子、細胞および動物を用いた一連の実験において、放射線によって損傷を受けた膠芽腫細胞では、Rab27bという酵素が多く産生されていた。これにより、腫瘍細胞はエピレギュリンと呼ばれる増殖因子をより多く産生し、周囲の腫瘍細胞の増殖を促進させていた。Rab27b経路を遮断することで、膠芽腫腫瘍は放射線治療に対してより脆弱になり、この経路が将来の治療法の標的となる可能性が示唆された。詳しくは[こちら](#)。

抗体-サイトカイン融合は膠芽腫治療の可能性を示す

[Science Translational Medicine誌](#)に発表された研究によると、抗体(特定の標的に結合するタンパク質)とサイトカイン(免疫系を調節・刺激する)を融合させた分子は、膠芽腫の効果的な治療法として役立つ可能性があるという。膠芽腫細胞上のタンパク質を標的とした抗体(「L19抗体」)は、様々なサイトカインと関連していた。研究者らは、一連の実験でマウスのサイトカインのインターロイキン12 (mIL12)や腫瘍壊死因子 (mTNF)と融合した抗体を静脈注射すると、免疫系を介して腫瘍の破壊につながることを発見した。生存率は上昇し、治療により一部の動物で治癒が認められた。分析の中で論文の著者らは、ヒトの膠芽腫患者における免疫サイトカイン療法へ向けた心強い早期結果を説明している。詳しくは[こちら](#)を参照。免疫サイトカインを開発したPhilogen社の関連プレスリリースでは、膠芽腫を対象に免疫サイトカインL19-TNFの臨床試験も実施していることを強調している。詳細は[こちら](#) (同社プレスリリース)。

神経膠腫の診断とモニタリングのためのリキッドバイオプシーを開発

神経膠腫から循環血中に漏れた微量のDNA(「血中遊離DNA (cell-free DNA)」と呼ばれる)に存在する遺伝子突然変異を確実に検出し、モニターすることができる「リキッドバイオプシー」(血液検査)を開発したと、[Clinical Cancer Research誌](#)で研究チームが発表した。研究者らは、神経膠腫患者の血液サンプルと腫瘍生検サンプルを比較することにより、「デジタルドロップレットポリメラーゼ連鎖反応」(ddPCR)血液検査を新しく考案し、TERT遺伝子(それ自体が腫瘍の増殖を促進する)に影

響を与えるC228TおよびC250Tという2つの突然変異を検出、モニターした。この検査では神経膠腫の存在を62.5%の確率で検出することができたが、これは組織ベースによる *TERT* 変異の標準検出率と比較して、脳腫瘍の血液中の *TERT* 変異を検出するこれまでの同様の検査よりも改善されていたことを表す。論文の著者らは、このような検査が他の画像診断やモニタリング技術を補完する可能性があることを示唆している。詳しくは [こちら](#)。

学際的チームが脳転移のある患者に対する医療の質を測定する方法を考案

[JCO Oncology Practice](#) 誌に発表された論文によると、米国バージニア州の研究者らは、転移性脳腫瘍(体の他の場所から脳に転移した腫瘍)患者に行われた医療の質を評価・分析する方法を考案した。研究者らは、ある施設で2年間に治療を受けた233人の患者の転帰を分析することにより、様々な専門分野の関係者と協力しながら総合的な医療の質を測るためのシステムを構築した。この評価ツールには、生存率などの要因を考慮するだけでなく、患者が緩和ケアで診察を受けたかどうかなど、医療の質に関する結果も含まれていた。この方法の考案者らは、今後の改良点も含めこのツールが脳転移のある患者に対する医療の改善を促進させるのに役立ってほしいと述べている。詳しくは [こちら](#)。

超音波を使用してミリ単位の精度で脳内の部位に薬剤を誘導し放出

動物を用いた研究で、高精度で脳内に薬剤を集中・送達可能な超音波を用いた非侵襲的な薬物送達技術の試験に成功したことが、[Nature Communications](#) 誌に発表された。一連の実験では、薬剤の入った微小な脂質の小胞を、超音波感受性の気泡に取り付け、げっ歯類の血液中に注入した。そして低エネルギーの集束超音波を使用し、これらの薬剤担体を脳内の特定の部位に集中させた。その後これらの凝集した薬物粒子は、より高いエネルギーの超音波によって「uncaged(小胞から解放)」され、放出された薬物は血液脳関門を越えて脳内に直接到達した。このアプローチの将来的な適応の一つとして、脳腫瘍部位に直接抗がん剤を集中させ、必要な薬剤の投与量を削減できるかもしれない。詳しくは [こちら](#)。

【企業ニュース】

ノースウエスト・バイオセラピューティクス(Northwest Biotherapeutics)社がDCVax®-Lの第3相試験の「データロック」を発表

膠芽腫を対象とした個別化がん免疫療法であるDCVax®-Lの第3相臨床試験のデータベースが「ロック」されたと、同療法の開発元であるノースウエスト・バイオセラピューティクス社がプレスリリースで発表した。「データベースロック」とは、通常、既に収集された試験結果にこれ以上のデータを追加・削除することができなくなる時点を示しており、一般的にはすべての臨床試験データが受領・処理さ

れすべての問い合わせが回答されたことを確認する、最終的なデータ収集工程の後に行われる。同社はプレスリリースの中で、本試験を管理する独立したサービス会社は開鍵された本試験の生データに独立した立場にある統計家達がアクセスできるよう手配していると発表した。ノースウエスト・バイオセラピューティクス社は、現段階では独立的立場の統計家達以外、同社また他のいかなる関係者も、割付を明らかにしたデータにアクセスできないことを確認している。詳細は[こちら](#) (同社プレスリリース)。

Basilea社が再発膠芽腫を対象としたリサバンブリン (lisavanbulin) の第2相拡大試験を開始

応答性予測バイオマーカーであると考えられるEB1 (End-binding protein 1) が陽性の腫瘍を有する再発膠芽腫患者を対象として、Basilea Pharmaceutica社は、腫瘍のチェックポイントを制御するリサバンブリンのバイオマーカーを用いた[第2相拡大試験](#)を開始したと発表した。Basilea社によると、同社の抗がん剤候補であるリサバンブリン (BAL101553、BAL27862のプロドラッグ) は、微小管に損傷を与えることで細胞分裂を停止させる薬剤であり、様々ながんに対する治療法になる可能性があるとして開発が進められている。詳細は[こちら](#) (同社プレスリリース)。

Medicenna Therapeutics社の再発膠芽腫に対するMDNA55療法が米国FDAとの会議を経て第3相臨床試験に進むことに

Medicenna Therapeutics Corp.社は、再発膠芽腫細胞に付着して破壊するように設計された、IL-4「スーパーカイン (Superkine)」分子と融合した毒素であるMDNA55の臨床開発に関する最新情報を発表した。MDNA55の規制および市販経路に関する米国食品医薬品局 (FDA) との第2相試験終了会議後、Medicenna社は、1DH1/1DH2遺伝子に変異のない再発膠芽腫患者を対象としたMDNA55の第3相試験を革新的な非盲検ハイブリッドコントロールデザインで進めるよう、助言を受けたと報告している。詳細は[こちら](#) (同社プレスリリース)。

米国食品医薬品局 (FDA) が、小児髓芽腫向けにY-mAbs Therapeutics社の放射線放出核種で標識した抗体を治験新薬として承認

Y-mAbs Therapeutics社の髓芽腫に対する放射免疫療法薬¹⁷⁷Lu-omburtamab-DTPAの新薬治験許可 (IND) 申請を、FDAが承認したことが発表された。この治療はある種のがん細胞上に発現する特定の分子 (B7-H3) を標的とする抗体を用いるが、その抗体には腫瘍内に放射線を放出する放射性物質であるルテチウム-177を結合させている。同社はプレスリリースの中で、小児の髓芽腫患者のスクリーニングを目的とした国際多施設共同第1/2相臨床試験を2020年の第4四半期中に開始することを予測していると発表した。詳細は[こちら](#) (同社プレスリリース)。

【その他のニュース】

ポップスターのトム・パーカー、膠芽腫診断後にもらった愛と支援に「圧倒」

大ヒットボーイズバンド「The Wanted」のメンバーの一人であるトム・パーカーが膠芽腫と診断されたことについて語った。32歳で1児の父であるトムと妻のケルシー・ハードウィックは、多くの人々が表してくれた愛、支援、そして前向きな気持ちに「圧倒された」と明かした。詳しくは[こちら](#)。

【学会ニュース】（抜粋）

現在のCOVID-19パンデミックの影響で、世界中の多くの対面式の会議や学会が中止、延期、またはバーチャルイベントに変更されている。私たちはこれらに遅れを取らないよう最善を尽くしているが、予定されているイベントの状況については、必ず会議主催者に確認のこと。

ISPNO 2020: 今年の第19回国際小児脳腫瘍シンポジウムはハイブリッド会議

ISPNO 2020は、2020年12月13日(日)～16日(水)の間軽井沢プリンスホテルウエストにて開催される。ハイブリッド会議となり、参加者は、現地での対面参加かオンラインでの遠隔参加かを選択することが可能である。80名の招待講師によるライブストリーミングコンテンツは、シンポジウム終了後にオンデマンドプログラムに収録・掲載される。オンデマンドプログラムでは、2020年12月13日から2021年2月13日までの間全858件の採択演題と13件のエデュケーションデイ講演を全登録者が視聴できるようにする予定である。詳細は[こちら](#)。ウェルカムビデオは[こちら](#)から。

2020年2021年に開催予定の、脳腫瘍患者やその擁護団体によるイベントおよび学術会議(バーチャルか対面かは問わず)を企画している方、ご存知の方、または上記イベントの変更にお気づきの方は、kathy@theibta.orgまで [イベントページ](#)に掲載可能。

IBTAウェブサイトの[会議ページ](#)で、今後の学術会議やイベントの最新情報を確認のこと。

== 翻訳者：坂下 美保子 / JAMT (ジャムティ) 翻訳チーム ==

IBTA（国際脳腫瘍ネットワーク）について

私たちについて 国際脳腫瘍ネットワーク（The International Brain Tumour Alliance：IBTA）は2005年に設立されました。各国の脳腫瘍患者や介護者を代表する支援、提唱、情報グループのネットワークであり、脳腫瘍の分野で活躍する研究者、科学者、臨床医、医療関係者も参加しています。詳細は www.theibt.org をご覧ください。

ご意見をお聞かせください。IBTAコミュニティで共有したいニュースがあれば、ぜひお聞かせください。宛先：chair@theibta.org 月刊ニュースレターやホームページを通じて、ご購入者の皆様にできるだけ多くの情報を中継していく予定です。メールニュース記事の選択は、編集者の裁量で行われます。 **Copyright © 2020 The International Brain Tumour Alliance. All rights reserved.** 無断複写・転載を禁じる。

（免責事項）国際脳腫瘍ネットワーク（IBTA）は、e-News（あるいはIBTA向け、またはIBTAに代わって作成されニュース内でリンクを提供しているすべての資料、報告書、文書、データ等）に掲載される情報が正確であるよう尽力しています。しかし、IBTAはe-News内の情報の不正確さや不備について一切の責任を負いません。また、その情報やリンク先のWebサイト情報など、第三者の情報の不正確さに起因する損失や損害についても一切の責任を負いません。このe-Newsに掲載される情報は教育のみを目的としたものであり、医療の代替となるものではなく、IBTAウェブサイト上の情報は、医療上のアドバイスや専門的サービスを提供することを意図したものではありません。医療や診察については、主治医にご相談ください。臨床試験のニュースを掲載することは、IBTAの特定の推奨を意味するものではありません。IBTA e-Newsからリンクされている他のウェブサイトは、IBTAは管理していません。したがって、その内容については一切責任を負いません。IBTAは読者の便宜のためにニュース内でリンクを提供しているものであり、リンク先のウェブサイトの情報、品質、安全性、妥当性を検証することはできません。IBTAのプロジェクトに企業が協賛することは、IBTAが特定の治療法、治療レジメン、行動の推奨を意味するものではありません。（スポンサーの詳細については、スポンサーシップ・ポリシーをご覧ください）。e-Newsに掲載されている資料の見解や意見は、必ずしも国際脳腫瘍ネットワークのものではない場合があります。